

タイトル

千鶴の恩返し

あらすじ

主人公・烏丸うずらは会社員。

ある朝、先輩の鶴野千鶴と朝の職場清掃をしていると、鶴野のスーツのボタンを見つける。

彼が裁縫セットの糸を切らしていたため、代わりにボタンを縫い付けると、翌日ランチに誘われる。

鶴野「君に恩返しをしたい」

なんと、彼が大手企業と大口の契約を結べたのはうずらのおかげだというのだ。

一度断ったが、結局うずらは鶴野の『恩返し』を受けることになる。

彼はランチを奢ってくれたり、残業しているとプリンを買ってきてくれたりと彼女に尽くしてくれる。

ある日、鶴野がぬいぐるみをプレゼントしてくれるが、それはどこのお店でも見たことがない。

不思議に思ううずらに、彼は「そのぬいぐるみのことは、何も聞かないでくれ」と頼んでくる。

ところが、ある日曜にイベント会場へ行くと、そこにはぬいぐるみを売っている彼の姿が……。

正体を知られて姿を消そうとする彼を、うずらは引き止めて、二人は恋人同士になったのであった。

本文

第1話

*背景：喫茶店（昼）

*立ち絵：鶴野

鶴野「君に恩返しをしたい。俺のお礼を受け取ってもらえないだろうか」

会社の先輩を助けたら、『恩返し』を受けることになった私。

私「私はお礼を受けるほどのことはしていません」

*立ち絵：鶴野表示アウト

*背景：暗転

そう断ったけど、結局鶴野先輩に『恩返し』をされることに。

そして、お礼をもらううちに、私は先輩の秘密を知ることになる……。

*背景：オフィス（朝）

私の名前は烏丸うずら。モズ株式会社に所属している会社員だ。

この会社に勤め続けてもう5年はたったかな。

まだまだ勉強しなきゃいけないこともあるけど、仕事はそれなりにやっている。

私「おはようございます」

*立ち絵：鶴野

鶴野「ああ、おはよう」

この人は先輩の鶴野千鶴さん。

普段から常に無口無表情で、正直近寄りがたいイメージがあるけど、挨拶すればきちんと返してくれるので悪い人ではなさそう。

私（あれ？ 職場にいるの、私と鶴野先輩だけなのかな？）

今日は早めに会社に来たんだけど、この時間帯だといつも鶴野先輩ひとりだけなのだろうか？

私「先輩、いつも会社に一番に来てるんですか？」

鶴野「そうだな。オフィスの掃除したり、色々準備したいことがあるから」

私「そうなんですね。今度から、私も手伝えるように早めに来ようかな」

鶴野「別に、無理してまで来なくていい」//ぶっきらぼうな口調で//

……。

うーん、余計なこと言っちゃったかな……。
どうもこの人にあまり好かれていない感じがしない。

まあいいや。
職場でだけの付き合いだし、こんなもんだよね。

私「とりあえずみんなが来る前に掃除済ませちゃいましょうか」

鶴野「……そうだな」

*立ち絵：鶴野表示アウト

そのままオフィスの掃除を始めたけど……。

私（……鶴野先輩、何も喋らないし、気まずいなあ……）

私（私がなにか喋ったほうがいいのかな……）

私（でも、また無愛想な態度取られても困るしなあ……）

私「……ん？」

*画像：スーツのボタン表示

私（服のボタン……？ 誰のだろう）

私（この会社の誰かのものだよね、捨てずにとりあえずポケットに入れておこう）

*画像：スーツのボタン表示アウト

*立ち絵：鶴野

私「先輩、掃き掃除終わりました」

鶴野「ああ、ありがとう」

私「……あれ？」

私「先輩、スーツのボタン、1個取れてませんか？」

鶴野「え？」

鶴野「本当だ……。しかも、よりによって一番目立つとこ……」

鶴野「参ったな、これから外回りに行くんだけど、どこに落としたんだろう？」

私「もしかして、このボタンじゃないですか？ さっき掃除した時に拾ったんですけど」

*画像：スーツのボタン表示

*画像：スーツのボタン表示アウト

鶴野「ああ、これだな。スーツの色と同じだし、他のボタンとも全く一緒だ」

鶴野「ええっと、裁縫セットは、と……げっ。糸が足りない」

私「私も裁縫セット持ってるので、よかったらボタンつけますよ」

私「ちょっとスーツ脱いでもらっていいですか？」

鶴野「あ、ああ……」//戸惑ったような声色//

*立ち絵：鶴野表示アウト

……。

私「はい、できました」

鶴野「ありがとう」

*立ち絵：鶴野

鶴野「……うん。烏丸さん、裁縫がうまいんだな」

私「ありがとうございます」

*立ち絵：鶴野表示アウト

その後、他の社員も続々と出勤してきて、朝礼を終えたあと、鶴野先輩は外回りに飛び出していった。

*背景：暗転

……そして、私が残業しているとき。

*背景：オフィス（夜）

私「うーん……」

私「さすがに疲れたなあ、甘いもの食べたい……」

??? 「はい」

私「えっ？」

トン、と私のデスクにプリンとカフェオレのペットボトルが置かれる。
おそらくコンビニで買ったものなのだろう。
慌てて顔を上げると、差し入れの主と目が合った。

*立ち絵：鶴野

私「つ、鶴野先輩、お疲れ様です！」

鶴野「ん。烏丸さんもお疲れ様」

私「あの、これは……？」

鶴野「朝のお礼。ボタンつけてくれたから。よかったら食べて」//薄く微笑む//

私「あ、ありがとうございます……」

鶴野「俺も同じの買ってきたから、一緒に休憩しよう」

先輩の持っているコンビニ袋から、同じプリンとカフェオレが出てくる。
ちょうど休憩したかったから、その気持ちがありがたかった。

私「それでは、お言葉に甘えて。いただきます」

プリンに付属しているプラスチックスプーンですくって口に入れると、優しい甘さが広がる。
カフェオレは砂糖が控えめで、それがプリンの甘みをさらに引き立てている。

私「おいしい……」

鶴野「よかった」//ニコっと笑う//

……笑ってる鶴野先輩、初めて見たかも。

鶴野「烏丸さんのおかげで、今回の外回りうまくいったから、ありがとう」

鶴野「じゃあ、また明日」

*立ち絵：鶴野表示アウト

……鶴野先輩、クールで無口、無愛想で正直何考えてるかわからないけど、どうも印象と違うみたい。

私（もしかしたら実はいい人なのかもしれないな……）

〈続く〉

第2話

*背景：暗転

*背景：オフィス（朝）

——翌日、モズ株式会社のオフィス。

部長「今日も朝礼を始めるが——」

部長「嬉しいお知らせがある。鶴野くんがレイヴンコーポレーションとの契約を成立させた」

*SE：拍手の音

社員「レイヴンコーポレーションって言ったら、知らない者はいない大企業じゃないか！」

社員「やったな、鶴野さん」

*立ち絵：鶴野

鶴野「ありがとうございます」//無感情に//

*立ち絵：鶴野表示アウト

鶴野先輩、相変わらず無愛想だな……。

昨日の微笑みが夢かなにかだったみたいだ。

そのまま朝礼が終わると、鶴野先輩がこちらに駆け寄ってきた。

*立ち絵：鶴野再表示

鶴野「烏丸さん、あとで話がある。昼休み、会社のロビーで待っていてほしい」

私「え……」

*立ち絵：鶴野表示アウト

私がなにか言い返す前に、先輩は歩き去ってしまった。

私（話ってなんだろう……？）

*背景：暗転

*背景：喫茶店（昼）

——そして、お昼休み。

私は先輩に誘われて、会社近くの喫茶店にランチを食べに来ていた。

*立ち絵：鶴野

私「珍しいですね、先輩とご飯食べるの」

鶴野「珍しいというか、初めてだな」//無表情//

鶴野先輩と、テーブルを挟んで向かい合って座る。

店員さんに料理の注文をしたあと、私は早速本題に入った。

私「それで、話ってなんですか？」

鶴野「恩返しを、させてほしい」

私「……はい？」

私は思わずキョトンとしてしまった。

恩返し。

その単語で思い当たるのは、昨日の出来事。

私「昨日、スーツのボタンを拾ったのはもうお返しにプリンをいただいたじゃないですか」

鶴野「昨日の君の機転のおかげで、俺は大口の契約をすることができた。

プリン1個だけじゃとてもこの恩は返しきれない」

私「そんな……。私、お礼を受けるほどのことはしていません」

だって、そうだろう。

私はたまたま掃除中にボタンを拾って、裁縫セットで縫い付けただけだ。

それと先輩が契約を成立させたのはなんの関係もない。

しかし、先輩は首を横に振る。

鶴野「あの日、スーツにボタンがついていなければ、あの契約は成立しなかったんだ」

わけがわからない私に、彼は説明を始めた。

なんでも、契約先の大企業、レイヴンコーポレーションはかなり服装にうるさいらしい。

その会社はアパレルやファッションブランドを扱っているので、まあ当然とも言える。

もし、先輩がスーツのボタンが外れていることに気づかず、そのまま取引に向かっていたら……。

おそらくは、この契約は成立しなかったのだと。

*立ち絵：鶴野表示アウト

*スチル：鶴野がうずらの手を取っているシーン

鶴野「頼む。君にどうしても恩返しをしたいんだ。俺のお礼を、受け取ってほしい」

……！

先輩が、私の手を取って、情熱的に語りかけてくる。

私はいつもと違う彼に驚いて、固まってしまった。

私「あ、あの……鶴野先輩……？」

*スチル表示アウト

*立ち絵：鶴野

店員「お待たせいたしました、こちら注文のドリンクです」

鶴野「！」//目を見開き、驚いた顔//

店員さんがテーブルにドリンクを置き始めたので、先輩は慌てて私の手を離し、両手をテーブルの下に引っ込めた。

心なしか、彼の顔が赤い気がする。

……そして、私も顔が熱くなるのを感じていたのだった。

*立ち絵：鶴野表示アウト

*背景：暗転

*背景：オフィス（朝）

——さて、それから毎日のように、鶴野先輩の『恩返し』が始まるようになった。

朝出勤すると、にこやかに挨拶をしてくれるし、昼になるとあの喫茶店でランチを奢ってくれる。

夜、残業していると、コンビニで買ったのであろう差し入れをくれるようになったのだ。

*背景：オフィス（夜）

*立ち絵：鶴野

鶴野「コンビニで買ったものじゃちょっとな。烏丸さん、何か欲しいものはないか？」

私「いえ……毎日こんなにお金使わせてるのが申し訳ないくらいなんですけど……」

鶴野「そんなこと、気にしなくていい。俺がやりたくてやっていることだ」

うーん……。

こないだまでの先輩が嘘みたいな変わりよう。

鶴野「そうだ。烏丸さん、こういうのは好きか？」

鶴野先輩が思い出したように、カバンを探り始める。

取り出したのは——

*画像：ぬいぐるみ表示

私「わ、可愛い！」

手のひらサイズの、小さなぬいぐるみ。

でも、見たことないな。

どこで売ってるなんのキャラなんだろう？

*画像：ぬいぐるみ表示アウト

鶴野「気に入ったなら、明日も別のぬいぐるみを持ってくる」

私「えっ？ でも……」

鶴野「……いないか？」//シュンとした顔//

私「いえっ！　すごく可愛いんですけど！」

私「いくらするんですかこれ!?　お金払います！」

鶴野「いない。それを大事に持っていてくれれば」

鶴野「それから……」//真剣な表情//

鶴野「俺と、約束してほしい」

鶴野「そのぬいぐるみのことは、何も聞かないでくれ」

有無を言わせないその口調に、私はうなずくしかなかった。

〈続く〉

第3話

*背景：暗転

*背景：同人イベント会場（昼）

さて、ある日曜日。

私はとあるイベントに来ていた。

私「うーん、やっぱりイベント会場の空気はおいしい！」

それは、色々な人達が手作りのアクセサリや小物などを持ち寄って売っている、いわゆるフリーマーケットだ。

私はそういった商品を眺めて、気に入ったものは買うのが趣味だった。

私「今日はどんな掘り出し物があるかな……」

私はルンルン気分で会場内を散策する。

キラキラと輝くアクセサリ、布製の小銭入れ、見覚えのあるぬいぐるみ……。

——ん？

見覚えのある、ぬいぐるみ？

*立ち絵：鶴野（私服）

鶴野「あ……烏丸さん!？」//驚いた顔//

私「えっ、先輩!？」

顔を上げると、エプロン姿の鶴野先輩と目が合った。

私「え……？ 先輩、ここで何してるんですか？」

鶴野「い、いや、ええと……」

先輩はしばらく宙に視線をさまよわせたあと、諦めたようにガックリと肩を落とした。

鶴野「……烏丸さん。イベントが終わる時間に、またここに来てくれないか？」

*立ち絵：鶴野表示アウト

*背景：暗転

私は、しばらく時間を潰して、イベントの終了を待ち、先輩と合流して近くのファミレスに入った。

*背景：レストラン（夕方）

*立ち絵：鶴野

鶴野「……君に贈っていたぬいぐるみ。アレは全部、俺が作ったものだ」

私「そうだったんですか……」

先輩はなぜか、とても落ち込んでいるように見える。

鶴野「俺は、もう君には会えない」

私「え？」

鶴野「君に知られてしまったら、俺はもう恥ずかしくて顔を合わせられない……。仕事も辞めようと思う……」

私「いや、なんでそうなるんですか……!？」

*鶴野、眉尻を下げて困った顔

鶴野「俺がぬいぐるみを作ってるなんて君に知られたら、笑われてしまうかと思っていた」

私「笑いませんよ。別に男がぬいぐるみを作ったっていいじゃないですか」

*鶴野、少し目を見開き、驚いた顔

私「私、あのぬいぐるみ、可愛くて好きですよ」

鶴野「……」

*鶴野、顔を赤らめて目を細める

鶴野「……俺も、烏丸さんが好きだ」

私「え？」

鶴野「スーツのボタンはきっかけでしかない。本当はずっと話しかけてくて、でも話題もないし……。恩返しという口実で、君に近づきたかっただけだ」

*鶴野、シュンとした顔

鶴野「……やっぱ変だよな、ごめん」

私「ふふ、全然大丈夫ですよ」

知らなかった。

先輩はいつも無表情だけど、本当はこんなに多彩な感情を隠していたのだ。

*鶴野、真剣な表情

鶴野「烏丸さん、あの……」

鶴野「今度から、うずらさんと呼んでもいいだろうか」

私「え……？」

鶴野「俺と、正式に付き合っしてほしい」

私「それって、つまり……」

鶴野「その、恋人になってほしい……い、言わせないでくれ、恥ずかしいだろう」//赤面//

私「つ、鶴野先輩……」

鶴野「俺のことは千鶴、と。そう呼んでほしい」

私「……千鶴先輩。私は先輩の恩返し、とても嬉しいです」

私「でも、これからは先輩だけが奢るんじゃなくて、二人で割り勘にしましょうね」

鶴野「それは……お付き合いを了承してくれる、という意味に受け取って良いのだろうか」

私「はい。これからも、よろしくお願いします」

*立ち絵：鶴野表示アウト

*背景：暗転

それから、私たちがお付き合いを始めて1ヶ月。
周りの同僚や上司からは、すぐに交際がバレて冷やかされている。

*背景：オフィス（昼）

会社では千鶴先輩は相変わらずの、何を考えてるのか分からない無表情で仕事に打ち込んでいる。
私も以前と変わらず、平常運転で彼に接し、いつも通り仕事をこなす毎日だ。

*背景：オフィス（夜）

——ただ、夜のオフィスで二人きりになると、先輩はちょっぴり甘くなる。

*立ち絵：鶴野

鶴野「これ、新作のぬいぐるみなんだが、どうだろうか」

私「わっ、かわいい！ 相変わらずいい仕事しますね」

彼の作るぬいぐるみはいつも丁寧な作りで、ちゃんとしたお店で売っているものと比べても決して負けないくらいだ。

私が両手でぬいぐるみを持っていると、不意に千鶴先輩の手が重なる。

私「千鶴先輩……？」

鶴野「先輩じゃなくて……」

私「……千鶴さん？」

鶴野「うん……うずらさん」

*立ち絵：鶴野表示アウト

*スチル：鶴野がうずらを抱きしめるシーン

鶴野「ありがとう、うずらさん。これからも、君に恩返しをさせてほしい」

私の部屋のベッドは、千鶴さんから贈られたぬいぐるみであふれている。
これは彼の想いの分だけ、これからもどんどん増えていくのだろう。

私「千鶴さん。私は千鶴さんから、十分以上にいただいていますよ」

私が彼の背中に手を回すと、抱きしめる力が強くなる。
どうやら千鶴さんの『恩返し』は、まだまだ続らしい。
私は目を閉じて、彼の抱擁を受け止めていた。

*背景：暗転

〈鶴野の恩返し 完〉